

〔原著論文〕

手話通訳者および手話学習者が捉えるコミュニケーション行為の認識 —手話に関する調査に基づいた現状と課題から—

川内 規会¹⁾

Recognition of the Communicative Behavior of Sign Language Interpreters and Learners: Examining the Current Situation and Problems Concerning Sign Language.

Kie Kawauchi¹⁾

Abstract

This study aims to investigate both what sign language learners' understand and what interpreters understand through sign language. We have two investigations: one is of students who have finished the sign language class and the other is of sign language interpreters who are taking care of deaf people. 97.0% of students have personal reasons for taking the sign language class at school and 92.7% of students had already recognized the usefulness of learning sign language for their future job. They hope to use sign language in health, medical and social welfare areas in the near future. Sign language interpreters would like the learners to learn, not only sign language, but also the difficulties deaf people face in their daily life, their history and their way of communicating. They would like the students to communicate with deaf people in order to understand their situation. In this research, we discovered that every sign language interpreter thought there were few sign language interpreters in Aomori, and they hope to spread recognition of the usefulness of sign language for communicating with deaf people.

(J. Aomori Univ. Health Welf. 8(1): 115-122, 2007)

キーワード：手話通訳者と手話学習者、認識、コミュニケーション行為

Key words : sign language interpreter and learner, recognition, communicative behavior

1. はじめに

青森県立保健大学では2003年のカリキュラムで「言語とコミュニケーション」の選択科目として「手話」が設置された。本学は看護学科、理学療法学科、社会福祉学科の3学科で専門職を目指す学生が集まっており、保健・医療・福祉の現場に聴覚障害者を助ける手段である手話を生かして欲しいという願いから開講された。その結果、現在まで毎年100名を越える多数の学生が選択し履修し続けてきた。そこで、5年目を迎えるにあたり、本科目が本来の設置の目的に適した科目として学生にとらえられているか、学生の認識に対する調査の必要性があると考えた。学生が手話学習を始めようと考えた動機や目的を把握することは、これからの手話学習のあり方を考える上で、基礎となる大切な情報であると思われる。また、

これから手話を学ぼうとする学習者と、聴覚障害者や手話通訳者の間には、手話そのものに対する捉え方に違いが見られるのではないかという疑問もあり、これらを明らかにすることは、コミュニケーション行為の再認識につながると考えた。

本研究は、大学生の手話授業を通して学習者の手話に対する意識調査を実施し、これらの結果に基づき、手話通訳者の調査協力を得ながら、学習者が捉える手話コミュニケーション行為と手話通訳者が捉える手話コミュニケーション行為の現状と問題点を明らかにすることを目指した。本研究は、聴覚障害者に必要なコミュニケーション手段を手話通訳者および手話学習者を通して考察するものである。

1) 青森県立保健大学健康科学教育センター

Training Center for Health Sciences, Aomori University of Health and Welfare

II. 調査目的

本調査は、現役の手話通訳者と初期の学習段階にある手話学習者を対象に手話を通じたコミュニケーション行為に対する意識調査を行うものである。調査対象である学習者側の学習環境は青森県立保健大学の「手話」講義を受講しており、1年次後期2単位60時間の授業が行われ、第2外国語（韓国事情と言語、中国事情と言語、ロシア事業と言語）の科目、および短期海外語学研修（English Communication）と並んで選択科目の一つに位置している。青森県ろうあ協会から派遣されたりあ者の方が講師となり、手話通訳者は2コマ（160分）の講義に毎回3名が携わっている。

本調査では、手話学習の前後における学生の意識変化を考察し、聴覚障害者に対する手話コミュニケーションの捉え方や、保健・医療・福祉関係に従事することを目指している学生の将来的なコミュニケーション活動の展望を明らかにすることが目的である。また、手話通訳者の立場から捉える手話コミュニケーションの現状と問題点を明らかにしていくことを目的としている。

III. 調査方法

学習者を対象とした調査と、実際の現場に携わっている現任手話通訳者を対象とした調査の2調査を実施した。

学習者対象の調査では、2004年度および2005年度に「手話」授業を選択した1年生170名を対象とし、授業終了後にアンケート形式で調査を実施した。調査対象者の内訳は看護学科106名、理学療法学科19名、社会福祉学科45名であり、手話の学習経験者が43名（25.3%）、未経験者が127名（74.7%）である。調査内容は、手話学習希望状況、手話学習を始めた動機、手話を学習する前と後の意識の変化、手話を通じたコミュニケーション活動の捉え方、将来的な手話とのかかわりに対する学生の意識などが主な項目である。

また、手話通訳者を対象にした調査は、2005年度および2006年度に実施した。調査対象者は本学の授業に携わった通訳者として青森県聴覚障害者情報センターから派遣された通訳者8名と青森県健康福祉部障害福祉課職員の手話通訳者1名、さらに2006年度青森県手話通訳者現任研修に参加した現任手話通訳者54名の合計63名である。調査方法は記述式質問紙調査の形で、本学の授業に携わった手話通訳者には授業終了後に実施し、青森県現任手話通訳者には、研修終了後に実施した。調査内容は、手話に携わろうとした動機、手話に触れてからの意識の変化、手話を通じた聴覚障害者のとらえ方、手話を学んでいる学生に望むコミュニケーション活動、通訳者の立場としての現状と問題点などの項目である。

IV. 結果

1. 学習者の調査結果

学習者である学生の「手話学習希望状況」を調査したところ、「以前から手話学習を希望していた」と答えた学生は153名、「今までは特に考えていなかった」と答えた学生は17名であった。手話を機会があれば学びたいと考えていた学生が9割を占め、今回の選択科目履修登録時に初めて手話について考えたという学生は1割であった。

「手話の科目を選択した動機」の質問では、図1のように上位3項目は、「将来の仕事に役立つと考えたから」34.4%、「以前から興味があったから」33.9%、「面白そうだったから」27.8%であり、全体に対してそれぞれの項目がほぼ同じ割合を占めた。「身近に手話を必要とする人がいたから」0.9%、「他に選択したい授業がなかったから」0.9%、「その他」と回答した学生は2.2%であった。

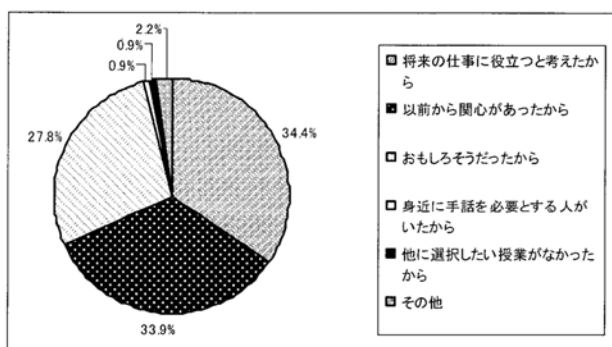


図1 手話の科目を選択した動機

「手話授業を終えて感じる事」では複数回答を求めたが、結果は図2を参照されたい。上位から順に「勉強になった」138人、「手話に対する興味が増した」99人、「もっと自分で学びたいと思った」97人、「聴覚障害者のことをもっと知りたいと思った」62人、「その他」1人という結果になった。また、「あまり勉強にならなかった」と否定的に回答した人はいなかった。

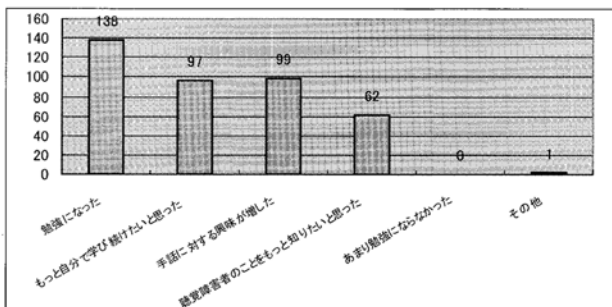


図2 手話授業を終えて感じる事

「コミュニケーション手段として考える手話の重要性」に関しての質問では「とても重要だと思う」が95%となり、コミュニケーション手段として手話を肯定的にとらえている学生が多く、「コミュニケーション手段の一部にしか過ぎない」と答えた学生は5%であり、「コミュニケーション手段としてはあまり重要ではない」と答えた学生はいなかった。手話コミュニケーションが聴覚障害者の生活に大きな影響を与えていると学生は考えていた。

学習者が「聴覚障害者と手話でコミュニケーションをとる行為」に関しては、「コミュニケーションをとりたいと思う」62%、「コミュニケーションをとりたいができないと思う」38%と回答しており、「手話を使ってコミュニケーションをとる必要はない」という回答者はいなかった。また、コミュニケーションをとりたいが不可能だと回答した学生から、不可能である原因を調べると、能力的な問題（まだ完全に身につけていないので、今のままではできない）85%、環境的な問題（身近に障害者がいない）14%、時間的な問題（余裕がない）1%という解釈であった。

「手話授業後の心理的变化」を調査した結果では、図3の回答が得られた。

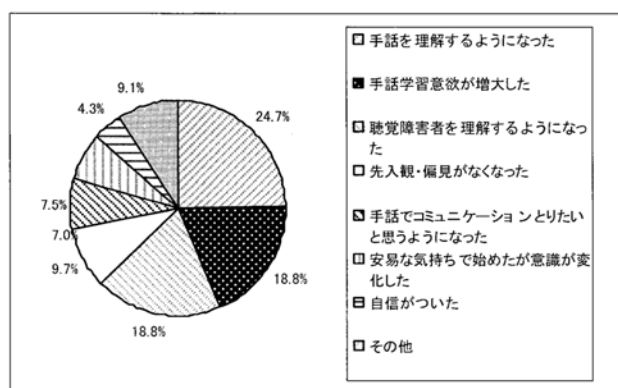


図3 手話授業後の心理的变化

「手話を理解するようになった」24.7%という回答の中には、「手話そのものができるようになった」という理解と、聴覚障害者に対して手話が「言語そのものの働きをしている」などの理解も含まれていた。「手話学習意欲が増大した」18.8%では、もっと学びたいと継続的な学習を望んでいる学生が多かったことを示している。「聴覚障害者を理解するようになった」18.8%と「先入観・偏見がなくなった」9.7%は、どちらも聴覚障害者に対する学習者の意識の変化であり、両者を合計すると28.5%と高い割合を占めることになる。以下、「手話でコミュニケーションをとりたいと思うようになった」7.5%、「手話学習を安易な気持ちではじめたが意識が変化した」7.0%、

「自信がついた」4.3%、「その他」9.1%と続く。また、少数回答の「自信がついた」には、「手話ができるようになった」という自己の学習能力に対する自信と、「聴覚障害者とコミュニケーションがとれる」という対人関係における自信の両解釈があった。

最後の質問項目は「将来の仕事に手話がどのように活用されると考えられるか」であるが、学生の回答は図4を参照されたい。

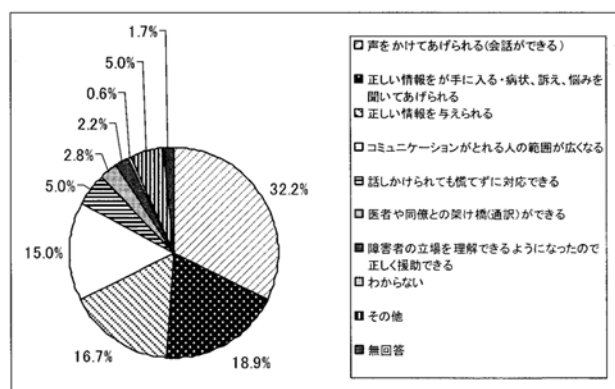


図4 将来の仕事に手話がどのように活用されるか

回答数の多い順に、「聴覚障害の患者またはクライアントに対して声をかけてあげられる/会話ができる」32.2%、「患者/クライアントから正しい情報・必要な情報が手に入る/病状・訴え・悩みを聞いてあげられる」18.9%、「患者/クライアントに対して正しい情報・必要な情報を与えられる」16.7%、「コミュニケーションがとれる人の範囲が広がる」15.0%、「患者/クライアントから話しかけられても慌てずに対応できる」5.0%、「患者/クライアントと医者または同僚との架け橋(通訳者)になることができる」2.8%、「聴覚障害者の立場を理解できるようになったので、正しく援助できる」2.2%、「わからない」0.6%、「その他」5.0%、「無回答」1.7%となった。これらの上位回答では、健聴者に対応する時のように、聴覚障害者の患者/クライアントと通常行われる日常会話ができること、必要な患者の情報が正確に手に入ること/与えられることなどを挙げており、普通に健聴者とのやり取りと同じ行為ができるという点を指摘している。参考例として表1のとおり、多数回答から6例と少数回答から5例を挙げた。

2. 手話通訳者の調査結果

手話通訳者がこの仕事に携わろうとしたきっかけは、大きく2つに分けられた。聴覚障害者と出会うことにより「コミュニケーション手段として必要になった」(23件)という必然的な要因と、聴覚障害者について学習することによって「手話通訳が大切であることを知った」(25件)

表1 将来の仕事に手話がどのように活用されるか

| |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 多数回答 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・相談者が聴覚障害者だったら、手話のできる人のいる相談場所は、立ち寄りやすく相談しやすいと思う。 ・聴覚障害者が病院に来たとき、少しでも会話ができたら不安感を取り除いてあげられると思う。 ・これからは聴覚障害者に対して差別なく対応できると思う。 ・手話通訳のできる社会福祉士（看護師・理学療法士）になって、地域で活躍する。 ・必要な情報を与えることにより、精神的に、治療に専念してもらえる。 ・直接的に援助してあげられる。 |
| 少数回答 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・病院で手話が通じなくて患者を死亡させてしまったという事例もあるので、医療者も手話を学ぶべきだと考える。 ・地域の人々に少しでも多く手話を伝え、聴覚障害者に協力してあげるよう指導する。 ・聴覚障害者だけでなく、耳の遠くなった高齢者にも身振りで伝えることができる。 ・聴覚障害の患者だけでなく、障害をもつ家族も含めて、健聴者と同等のコミュニケーションをとる必要がある。 ・聴覚障害者と一緒に仕事をするときにも使える。 |

という学習による要因であった（その他9件、無回答6件）。体験上必然性を感じたという回答の内訳は、「聴覚障害者が身近にいて、コミュニケーション手段として必要になったから／聴覚障害者との筆談でのコミュニケーションには限界があると思ったから／聴覚障害者と接触をしながら情報を保障するには手話が必要だと思ったから」などであった。また、学習により必要性を感じたという回答の内訳は、「手話講習会に参加したこと／手話に興味を持ち学んだことから聴覚障害の世界を知った

から／手話通訳者の数があまりにも少ない現状を知ったから」などであった。前述のⅣ－1による学生の調査では、学生は体験上から手話が必要であったという回答は極めて少数であったが、学習により手話の必要性を感じたという回答が多かった点では、共通しているようである。

手話を学び始めた頃から手話通訳者としての現在までの間で、手話に対する意識の変化を調査したところ、代表的なものは表2のとおりとなった。

表2 手話に対する意識の変化

| | 手話を学び始めた頃 | 手話通訳者としての現在 |
|---|-------------------------|--------------------------------------------|
| A | 聞こえない人の単語のようなもの | 聴覚障害者同士の確立した「言語」であるという認識が深まった |
| B | ただ手を動かして理解してもらうもの | どのようにしたら聴覚障害者に的確に伝わるか意識するようになった |
| C | 道具を使うような感覚 | 自然な気持ちの表現方法となった |
| D | 深く考えずに聞こえない人と会話がしたいと思った | 聞こえない人たちの大切な言葉であり、意思表示方法であると感じている |
| E | 趣味で、いつでもやめられるもの | 聴覚障害者にとって手話は生活そのものなので、やめることはできないということを痛感した |
| F | 手話を学ぶことが楽しい | 伝えることの責任感を感じている |
| G | 手話ができれば通訳ができる | 「手話ができる＝手話通訳ができる」ではなく、専門知識が必要だとわかった |

手話を学び始めた頃は、学生の調査結果と同様に趣味や興味で始めた人もいたが、手話通訳者という職業になるとその意識も大きく変化し、それぞれが聴覚障害者に対する責任を果たす役目という認識が働いていることが伺える。

青森県の手話通訳者の現状を調査したところ、「足りて

いる」「ほぼ足りている」と回答した人はおらず、「やや不足している」が9.5%、「不足している」が85.7%、「無回答」が4.8%であった。また、手話通訳者を増やすにはどのような試みが必要であるかという質問には表3の回答を得た。

表3 手話通訳者を増やすにはどのような試みが必要であるか

多数回答

- ・義務教育の中に手話やろうあ者の歴史、生活を教科として導入して欲しい。
- ・各県に公立で専門の養成機関の設置をして欲しい。
- ・行政でも手話通訳者の養成事業などを積極的に行って欲しい。
- ・教育の中で手話や聴覚障害者の存在に触れることで興味を持つ人がでてくると思う。

少数回答

- ・青森県には手話のできる医療従事者が少ないので、聴覚障害に理解のある医療従事者が増えて欲しい。
- ・実習のような現場実践がもっと必要である。
- ・指導者を大切に、手話の魅力を伝える場を増やす必要がある。
- ・手話に興味を持つ人を増やし、手話通訳に興味を持つ人を増やさなければならない。

上記の回答から、個人および機関等への期待が見受けられ、現状を理解し改善して欲しいと願っていることがわかる。

「手話の授業で学生に学んで欲しいこと」を調査した結果は図5を、「手話は聴覚障害者のコミュニケーション手段としてどのような位置を占めるか」を調査した結果は図6をそれぞれ参照されたい。

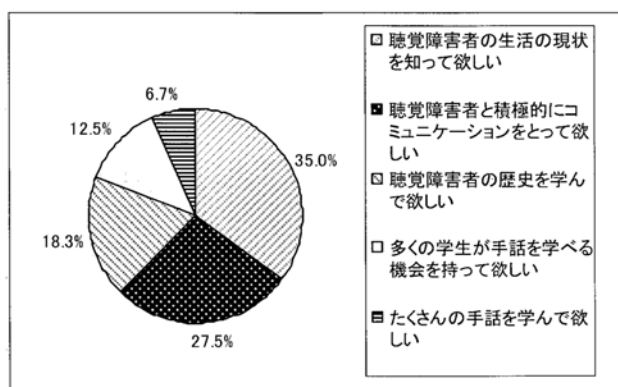


図5 手話学習者に学んで欲しいこと

図5のように「手話学習者に学んで欲しいこと」では、「聴覚障害者の生活の現状を知って欲しい」が最も多く35.0%、続いて「聴覚障害者と積極的にコミュニケーションをとって欲しい」27.5%、「聴覚障害者の歴史を学んで欲しい」18.3%、「多くの学生が手話を学べる機会を持って欲しい」12.5%、「たくさんの手話（単語）を学んで欲しい」は6.7%であった。手話を学ぶ授業では、手話の技

術そのものよりも、その背景、聴覚障害者の歴史、生活を学んで欲しいと考えていることがわかる。

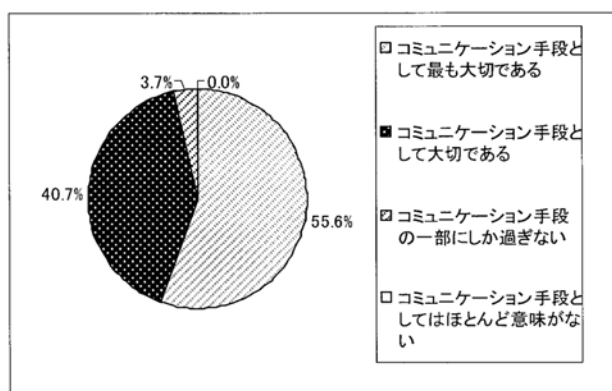


図6 手話はどのような位置を占めているか

図6では「手話はどのような位置を占めているか」を調べた結果、「コミュニケーション手段として最も大切である」55.6%、「コミュニケーション手段として大切である」40.7%と回答しており、9割がその重要性を訴えている。続いて「コミュニケーション手段の一部にしか過ぎない」3.7%となり、「コミュニケーション手段としてはほとんど意味がない」という回答はなかった。手話通訳者は手話がコミュニケーション手段として重要であると認識していることがわかる。

手話通訳者から「学生に手話を通して望むこと」を調べた結果、回答が複数であるものを表4に示した。

表4 学生に手話を通して望むこと

- ・健常者は忘れがちだが、障害のある人がこの世にいるということを常に頭に入れて欲しい。
- ・医療福祉系の専門職として手話をコミュニケーションの方法として活用することにつなげて欲しい。
- ・手話とは何かをもう一度考え直して欲しい。
- ・生まれつきの障害、中途からの障害等、聴覚に障害を持つということはどういうことなのかを少しでも理解して欲しい。
- ・これをきっかけに、積極的に聴覚障害の方とコミュニケーションをとって欲しい。
- ・聴覚障害者の現状を真剣に学んで欲しい。遊び感覚で手話授業は受けて欲しくない。
- ・ろうあ者の考え方、感じ方、常識を理解して欲しい。
- ・手話を「技術」だけでなく、「聴覚障害」という事に対しても興味を持って学んで欲しい。

V. 考察

学習者の調査結果から、9割の学生は手話の学びが将来の仕事にどのように活用されるかを明確に回答しており、手話の授業を選択するにあたり9割を超える学生が手話を機会があれば学びたいと考えていたことが明らかになった。また、手話の科目を選択した動機を調査した結果から、上位回答は「将来の仕事に役立つと考えたから」、「以前から関心があったから」、「面白そうだったから」という順で96%を占めた。選択理由としては安易に思われがちで、関心があった、面白そうだという回答にも、なぜ関心があったのか、なぜ面白そうだと感じたのかという点を踏み込んで考えるなら、新しいコミュニケーション手段が増えるという前向きな発想からであることは、手話の重要性についての回答結果からも理解できる。また、学生は手話学習以前から、機会があれば手話を学びたいと考えていた点に関しても、身近に聴覚障害者が存在しないという手話の使用が必要に迫られた環境でない状態にもかかわらず、将来の仕事に役立つと考えて手話学習を始めていたことは、将来的に手話の価値を認識した上で授業を選択していたといえる。

手話授業を終了後の意識調査の結果では、学習後の学生は向上心にあふれており、手話に対する興味も増し、継続して学び続けたいと考えていることがわかる。また、聴覚障害者に対する理解、および先入観・偏見を取り除く貴重な機会をつかんだと思われる回答も多かった。保健・医療・福祉系の学生にとって、将来社会に出てから多くの人々と接触をする職種につくことを考えると、手話を学ぶことは、聴覚障害者とのコミュニケーションの範囲が広がることにつながり、その意義は大きいと思われる。

将来の仕事と手話の関係を調べた結果は、大きく2つに分類できる。それらは、聴覚障害者に普通に声かけられる・会話が出来る・医師や同僚との架け橋ができるなどのように「コミュニケーション範囲が広がること」を挙げている回答（55%）と、正確な情報を与えたり受けたりできる・聴覚障害者の立場を理解し正しく援助できるなどのように「コミュニケーション情報の正確性が上がること」を期待している回答（38%）である。特に患者／クライアントに正しい情報・必要な情報を与えられ、病状や訴え・悩みを正確に聞いてあげられるという点では、保健・医療・福祉の現場に手話を活かして欲しいと願う本学の手話授業開設の目的に合致しており、学生も将来的に手話を職場で役立てたいと考えていることがここでも明確になった。

コミュニケーションの原点である、人と話をしたい、情報交換したいという純粋な発想は、手話というコミュニケーション媒体から、聴覚障害者と瞬時にまた的確に

会話が交わされることで満たされる。健聴者が忘れがちな正確性を求めたコミュニケーション行為の原点を表していると思われる。健聴者はいつでも話しかけたいときに発話し、訴え、感情を表現したいときにはいつでも伝えることができる。また、知りたい情報をいつでも得られるという安心感もあり、聞こえない、確認できないという不安感は、健聴者の日常生活には現れないものである（山口、2003）¹⁾。これを異文化の接触に置き換えるならば、自分の理解可能な言語が通用しない国に、1人で滞在するときに、多くの不安を抱えることと同じである。必要な情報が得られず、聞き返せず、周りが自分を気にかけずに日々の生活が進むにつれ、コミュニケーション手段を断たれた不安と生活の不便さ、精神的苦痛を必ずや感じることになる。その結果ストレスがたまり、対人恐怖症になる例も少なくない。仮に、その場に自分の理解可能な言語を話す人が身近にいて協力してくれたなら、生活に対する不安感は極端に減ることが考えられる。聴覚障害者の場合も同様で、手話を介して人とつながり情報交換できることは、不安感を取り除く大きな助けになる。

手話学習者である学生が、学習していく段階で、聴覚障害者と手話でコミュニケーションをとりたいと感じるようになったのは、聴覚障害者にとっての手話が言語として重要な役割を果たしていることを深く認識したことを意味している。学習の初期段階では、障害者とコミュニケーションをとるときに誤解や伝わらないことに不安を感じ消極的行為が見られた学生も、聴覚障害者の日常生活や歴史的背景、多様な相互理解の方法を学ぶことで、伝わらないことへの不安や恐れが学習の最終段階では取り除かれ、コミュニケーションをとりたいと感じるようになっていく。このことは大きな意義があり、学習者の確実な意識の変化であるといえる。

次に手話通訳者の調査結果から手話に対する認識を考察する。手話通訳者が学習者である学生に望んでいることは、「聴覚障害者の考え方や感じ方を理解し、手話を“技術”だけでなく、“聴覚障害”という事に対しても興味を持って学んで欲しい」ということであり、このことに関しては手話通訳者間に共通認識が見られた。また、手話通訳者全員が「青森県の手話通訳者は完全に不足している」と回答していた点に関して、実際の手話通訳士登録状況（2007/03/05現在）を調べると、全国では1,555名の登録があり、青森県（16名）は東北地方の他の5県に比べると登録通訳者は一番多く、また、ほぼ同数の人口をもつ愛媛県（16名）、奈良県（17名）などと比べても決して少なくはない。この結果を鑑みると、青森県のみならず全国的に手話通訳者が足りない現状にあり、実際に手話通訳に携わっている通訳者はこの全国的な問題で

ある通訳者不足を身近に認識していたものと思われる。特に手話のできる医療・福祉関係の従事者が少ない現状であるため、将来的に保健・医療・福祉関係に携わることを目指している学生に対しては、聴覚障害者を理解し援助して欲しいと期待するところが大きいことが考えられる。さらに、手話通訳者は公的機関に対して手話通訳者の養成講座の開講や指導者の養成、手話そのものの普及活動の援助を期待しており、義務教育に手話やろうあ者の歴史、生活を教えて欲しいと願っていた。また、手話学習者に対しても、手話の技術そのものを学ぶのではなく、聴覚障害者の歴史や生活の現状を知ってもらい、地域の手話をとりまく現状把握をしてほしいと望んでいた。本調査では、手話通訳者の9割がコミュニケーション手段として手話を「最も重要」または「重要」であると認識しており、その重要性をこれから活躍する学習者に対して正しく理解して欲しいと訴えていることがわかる。

コミュニケーションは、「対話する双方に情報伝達があり、情報の共有を通じた共同化が芽生える。情報が共有されることは、それによって共通認識が生まれ、人と人の結びつきが強まる。また、対話の中の情報の共有化は話し手と聞き手の間で互いの応答や応酬を呼び起こし、双方の評価能力や判断能力を喚起する力を生み出す（植村、2001）²⁾」と言われている。つまり、コミュニケーションには互いに判断しあう能力を発達させたり、共感しあう力を引き出す刺激が組み込まれていると思われる。反対に対話の場を持たないことは、発達場の失われることを意味し、人はしばしば孤独となり落ち込む原因となる。この点から鑑みると発話の場を持たない聴覚障害者は、共に発達しあう人間関係や豊かな共感関係が失われがちとなる。しかし、情報から遮断され孤立し自己評価を下げてしまうコミュニケーション不全は、聴覚障害者が相互にコミュニケーションをとる手段を持つことで解決できる。その手段の一つが手話コミュニケーションであり、対話による人間関係を回復・再生し、それぞれがもっている評価・判断能力の発達や共感する力を発展させる役割を担っているのではないかと考える。手話は、歴史的にも情報の伝達を媒介する大きな役割を果たしてきたが、さらに複雑な現代社会において複雑な情報のやり取りは不可欠となり、聴覚障害者の豊かな人間関係を築くためには、手話が重要な役割を担っていると考えられる。

VI. まとめ

手話学習者は、経験豊富である手話通訳者を見て聴覚障害者とのコミュニケーション方法を学ぶ。手話学習過程における学習者のコミュニケーション活動は、手話を

完全な言語として使用できるレベルまで達していない。しかし、その段階で生み出されるコミュニケーション行為には、その段階としての価値があると考えられる。それは聴覚障害者に対する意識が変わる過程であり、手話をコミュニケーションの媒体として、また言語として吸収したいと考え始める時期でもあり、将来に向けて意欲があふれている段階といえるからである。

手話を通して手話学習者および手話通訳者の意識調査を実施したことで、健聴者に対してもコミュニケーションの原点が問われたように思われる。声を掛け合うことは何をもたらすのか、また、情報が途絶えたときの不安感は何で補うことができるのか、対人コミュニケーションの原点をあらためて感じさせられた。現代の若者同士のコミュニケーション問題、高齢者を取りまくコミュニケーション問題、家族のコミュニケーション問題など身近に様々なコミュニケーションに関わる社会問題が起きているが、コミュニケーションの原点は、「必要な情報の共有」、「お互いを分かり合う」、「不安を取り除く」であり、バーンランド（Barnland, 1970）³⁾の示す「自分の知識を広め、相手を深く理解し、それぞれに共同の意味解釈を求めてお互いに努力するプロセス」⁴⁾であったはずである。前述のような問題点を持つ現代の不健康なコミュニケーションが多い中で、聴覚障害者が音の聞こえない世界で言葉を持ち、言葉を学び、それらを活用したいと考える本来のコミュニケーション行為は、健聴者にコミュニケーション活動の原点を伝えているように感じる。

手話通訳者の意識調査の中に、「はじめは趣味で手話を学び始め、いつでもやめられるものと考えていたが、聴覚障害者にとって手話は生活そのものであり、やめることはできないことを痛感したため、手が動く限り生涯にわたって手話通訳者として責任を果たしたい」という回答があった。この意識の変化は、手話通訳者や聴覚障害者にとって、また、手話学習者や健聴者にとって、コミュニケーション行為における手話の意義を再認識させられる言葉である。

本研究は、手話通訳者及び手話学習者が捉えるコミュニケーション行為としての手話に対するそれぞれの認識について意識調査を基にまとめた。今後は、これらの研究結果を活かして手話を通じたコミュニケーション活動のさらなる研究へ発展していきたいと考えている。

（受理日：平成19年6月1日）

引用文献

- 1) 山口利勝：中途失聴者と難聴者の世界。一ツ橋出版株式会社、2003.
- 2) 植村英晴：聴覚障害者福祉・教育と手話通訳。中央

法規出版株式会社, 2001.

- 3) Barnland, D.C. : A Transactional Model of Communication. In J. Akin, A. Goldberg, G. Myers & J. Stewart (Eds.) Language Behavior: A Book of Readings in Communication. The Hague: Mouton, 48, 1970.
- 4) Myers, G. E. & Myers, M. T.: The Dynamics of Human Communication: A Laboratory Approach. Mac Graw-Hill, Inc. 6th Edition, 1992.

参考文献

一番ヶ瀬康子監修:聴覚・言語障害者とコミュニケーション. 一ツ橋出版株式会社, 2000.